

188

こんにちは。塾長の大井です。

TOPに通われているご家庭から、小さな弟さん妹さんについて、学習アドバイスを求められることがよくあります。

「三つ子の魂百まで」という箴言を引くまでもなく、幼少期の勉強はものすごく重要です。

この時期の10は後の100や1000に相当します。

私が考えるその時期に大切なことは、3つあります。

まず、学習習慣の徹底です。

手を洗うように、歯を磨くように、学ぶことを生活の一部にしてしまうことです。

初めはその子に合った必ずやれることにかまいません。

例えば、朝テーブルで計算だけは必ず。

場所・タイミングを決めて、それを例外なくずっと続けます。

そしてそれを少しずつ、質量を上げていきます。

ここで重要なのが、目一杯褒めること。この時期のお子さんに対して褒めすぎはありません。

たくさん褒め、認めることで学ぶことやそれに取り組むことに確かな価値があると実感させるのです。

次は、読解力や漢字や計算の土台を築くことです。

江戸時代の寺子屋の「読み・書き・そろばん」ではありませんが、この3つのどれか1つでも欠けると、後の勉強はぐっと苦しくなっ
てきます。

そういう意味において公文は反復練習には有効です。

ただし、頭が止まっていたらマシンに成り下がります。

計算の速さや語句の知識は、思考の礎にはなりますが、思考力そのものを鍛えることとは大差があります。

出来るだけ意味やなぜそうなるかという実感を伴わせながら、習得していくことをお勧めします。

そして最も重要なのが、知的好奇心の育成です。

これは絶対に家庭の作る環境や与える知的刺激がモノをいいます。
環境のないところに知的突然変異を望むのは、稀にはあるかもしれませんが至難だと思えます。

そして知的好奇心を育てる上で一番効果的なのが、親子で「共にする」ということです。

教養番組を観る、博物館に行く、自然に触れる、映画を観る、本を読む。

何でもいいのですが、知的な営みを親と実際に共に体験・体感することで、sense of wonder が育まれていきます。

「不思議だね」「面白いね」「何でかな」

幼児期は誰もが、そんな不思議の感覚を養うのに最適の柔らかい頭と心を持っています。

私も子どもたちに以上3点を与えてきました。

今のところ、これらの意識はとても有用だったと感じています。ぜひご参考になさってください。

2018年6月25日

大井雄之